

こうやってこう、こうじゃなくてこう。
—橋本匠「ひらがな・仮」踊られる文字

スピーカーから流れる「こうやってこう」「こうじゃなくてこう」という老婆の声。私がここに記す固い文字の並びでは、その情報の半分も伝えることができない。しかし橋本のダンスは、それがどんな「こう」であるのかを雄弁に語った。

橋本匠「ひらがな・仮」は、書家である彼の祖母がひらがなの成り立ちについて語る音声から始まる。それにあわせて、ふんどし姿の橋本が踊る。

音声は、実際に祖母が文字を書き、橋本本人と会話しながら録音されているようであった。ひらがな一文字一文字について、どの漢字から生まれ、どんな意味をもち、自然界のどんな情景をあらわし、書くという動作をする際にどのような流れや勢いが必要かなどが、丁寧に説明される。

音声と同時進行で展開される橋本のダンスは、祖母の言葉をあますことなく体現していた。水、川など具体的なものを示す言葉には、彼自身がそのものになったかのような振付がなされる。大きい、ちょっと、さらさらなど、程度を示す言葉が流れると振付の程度もそのとおりになる。さらには祖母の声の調子や間合い、あいずち、説明する際の迷いや思考の揺れ、感情さえも、全ての瞬間において細かな要素が複合的に表現される。力強く全身で踊るというその方法は、文字の「書かれる」「読まれる」という一般的なラインを越えた、「踊られる」という新たなアクセスであるように思えた。

本来、祖母の語る「こうやってこう」は、彼女の筆を運ぶ動作や、その結果書かれた文字を目にして初めて成立するものであると思われる。しかしここではそれが、祖母の筆ではなく橋本の身体で、書くという動作ではなく踊るという動作によって表現される。つまり、祖母の伝えた情報が異なる要素で再構築されるのである。橋本の踊る「こうやってこう」は、彼の隣にいる祖母が発した、きわめて純度の高い「こうやってこう」なのであった。音の波長としてボイスレコーダーで記録された祖母の音声と、抽象的な表現を介してその質感を語る彼のダンスが合わさることで、祖母の伝えた「こうやってこう」が、時間や場所を越えて現前したのである。

その姿は、彼自身が筆となり、感覚の奥深くに眠るまだ誰もみた事がない文字を書いているようにもみえた。「文字を書く」という日常の範囲では極めてミニマムな、指先で行われる繊細な動作を、ふんどし一丁でダイナミックに昇華する。私は、とにかく目が離せなかった。

最後にもう一度、祖母の音声流れる。当日パンフレットには書きかけのひらがなのような図版が添付されていた。「あ」のような「の」のようなそれは、橋本が初めて書いた文字であるという。彼はその言葉を踊る。祖母のまなざしと、彼が初めて文字にふれたという、無垢なエネルギーの爆発を纏いながら。

(1130文字)
楠海緒